

心態表現としての過去完了

白 谷 敦 彦

0. 序

次の(1)のように before 節に過去完了があらわれることがある。

(1) I saw him before he had seen me. (Declerck 1979: 720)

Before 節に過去完了があらわれることがあるという言語事象の指摘は Jespersen (1931) にすでにあるが、それに説明を試みたのは Declerck (1979) である。Declerck はこの過去完了を仮定法であるとした。しかし、上野 (1987)、川瀬 (1989)、松村 (1989)、江口 (1989) により、この過去完了は仮定法ではなく、直説法であることが示され、Declerck の説明に替わる説明が提示された。こういった経緯で before 節における過去完了はかなり解明されてきたのであるが、本稿では、残された問題、つまり、なぜ過去完了が、Declerck が説明づけるのに仮定法までも持ち出してしまふほど心態を表現できるのかということについて、before 節にあらわれる過去完了だけでなく、広く過去完了をみることで明らかにする。

1. 問題点提示

Declerck が、(1) のような before 節にあらわれる過去完了を仮定法であるとする根拠は次の通りである。

- (i) 直説法であるとする、(2)、(3) の容認度の違いが説明できない (p. 725).
- (2) *John wrote a novel before he had died.
- (3) The executioners buried John before he had died.

(ii) 直説法であるとする、単純過去を用いた(4)と過去完了を用いた(5)の容認度の違いが説明できない。また、(6)のように *ever* を加えると容認されることが説明できない (p. 725)。

(4) *Mary closed the door of our house before I was in.*

(5) **Mary closed the door of our house before I had been in.*

(6) *The storm demolished our new house before I had ever been in it.*

(iii) 直説法であるとする、(7)と(8)にみられる(9)のような違いを説明できない (p. 728)。

(7) *John dived into the swimming-pool before Mary put water in it.*

(8) *John dived into the swimming-pool before Mary had put water in it.*

(9) i (7)では *before* 節のできごとは実現したと考えられるのに対し、(8)ではそういった含意はない。

ii (8)には、*A before B* で表されているできごとの前後関係がその逆の *B before A* で生じることが予想されていたのにもかかわらずそうならなかったという含意がある。

これらの *Declerck* の主張点のうち、(ii)と(iii)の一部((9-i)について)はすでに、上野、川瀬、松村、江口らの論考により解決はなされたので、紙面の都合上、これらのことについてはそれらの論考を参照されたい。残る問題は(i)と(9-ii)についてである。(9-ii)は次のようなことである。(8)においては、メアリーがプールに水を入れてからジョンが飛び込むことが予測されていたのに、実際はメアリーは水を入れないうままにジョンが飛び込んだことになる。これに対し、(7)にはそのような予測の含意はない。なぜこのようなことが起こるのか、また(i)

に示された現象はどういう理由によることなのか、我々は「仮定法」という概念によらず、直説法の範囲内で説明できなければならない。次の節でまず、(9 - ii) について詳しくみることにする。

2. Before 節の過去完了

Before 節に過去完了が用いられると (9 - ii) を必ず含意するのかというところではない。次のAグループは (9 - ii) を含意せず、Bグループは (9 - ii) を含意する。

Aグループ

- (10) I reached the station before the train had left. (松村 1989:128)
- (11) The bell rang before we had finished our work.
- (12) He came before I had written the letter.
- (13) I sat down and tried a cocktail and three men smirked at me before I'd finished. (以上、松村 1989: 131)

Bグループ

- (14) John dived into the swimming-pool before Mary had put water in it. (=8) (Declerck 1979: 728)
- (15) I concealed myself before he had seen me.
- (16) The messenger was killed before he had delivered the message.
- (17) The witness disappeared before the inspector had heard him.
- (18) The surgeon started operating before the patient had been anaesthetized.

(以上、Declerck 1979: 730)

AグループとBグループの違いは、Bグループの A before B という表現において、Aが起こるとBは起こり得ないもの、あるいは、BがAの前に起こることが常識である、ということである。このことからわかるのは、過去完了に2通りあるのか、あるいは、文脈が作用しているのか、2つのことが考えられるということである。しかし、単に文脈が表す含意とはいえない。Bグループの過去完了を単純過去に変えると(9 - ii)の含意を持たなくなるからである。

- (19) John dived into the swimming-pool before Mary put water in it.
- (20) I concealed myself before he saw me.
- (21) The messenger was killed before he delivered the message.
- (22) The witness disappeared before the inspector heard him.
- (23) The surgeon started operating before the patient was anaesthetized.

ある程度文脈が作用しているのかも知れないが、過去完了がないと(9 - ii)の含意が生じないということから、(9 - ii)の含意には根本的には過去完了がかかわっていることがわかる。

そこで我々は、これまで明示的な形では指摘されなかった直説法過去完了の別の用法があるのではないかという仮説のもとに論を進めてゆくことにする。次の節では、before 節から一旦離れ、過去完了の表し得る意味について考察する。

3. 含意を表す過去完了

Jespersen(1931)は次のような例文を挙げ、その例文の中にあられる過去完了を *imaginative tense*、つまり、仮定法だとしている(pp. 142-43)。というのは、意図していた(あるいは望んでいた)ことがらが実現しなか

ったという意味を持つからである。

(24) I had hoped to have seen you at our house.

(25) I had meant to have left off at this place.

(26) I had intended to have sent it many a long month ago.

(27) I had hoped to have seen you and Clara pull together.

しかし、この考えは誤りである。これらの例は直説法である。その理由は次のとおりである。まず、思っていたことがらが実現しなかったという意味は含意であり、次のように取り消せる。

(28) I had hoped to have seen you at our house, and I saw you.

(29) I had meant to have left off at this place, and I left off.

(30) I had intended to have sent it many a long month ago, and I did it.

(31) I had hoped to have seen you and Clara pull together, and I did it.

(24) から (27) の過去完了を単純過去に変え、完了形を完全に取り除くと、含意はなくなる。

(32) I hoped to see you at our house.

(33) I meant to leave off at this place.

(34) I intended to send it many a long month ago.

(35) I hoped to see you and Clara pull together.

ところが、過去完了を用いずとも、to の後に完了形を入れるとまた、もとの含意がもどってくる。

(36) I hoped to have seen you at our house.

(37) I meant to have left off at this place.

(38) I intended to have sent it many a long month ago.

(39) I hoped to have seen you and Clara pull together.

従って、含意は *imaginative tense* である（仮定法用法の）過去完了から生じるものではなくて、直説法の完了形からくる意味であるということが出来る。もちろん、*hope, intend, mean* といった「意図を表す動詞」以外の動詞では生じ得ない含意であるから、「意図を表す動詞」と完了形と一緒になって含意が生まれると言える。ではどのようにしてこの含意が生じるのか考察しよう。まず、「意図を表す動詞」が過去形で、*to* の後に完了形がくる例を考える。例文 (38) をもう一度取り上げてみる。

(38) *I intended to have sent it many a long month ago.*

これを単純過去で *I intended to send it* と表現すれば単に「送る (*send*)」という意図が過去においてあったということの意味するだけであるが、

(38) では「送る」ということに完了形が使われているので、行為の完了性が意識されており、「送ってしまう」、「送るという行為が終る」ということが意図 (*intend*) されていたことがわかる。そして、その意図は過去のものであることが *intended* という過去形で示される。従って、意図としては過去のある時点ではもう送るという行為が終わっていなければならなかったのであるが、その意図自体が過去のものであるということが表現されるのである。このため、意図したことがらは起こらなかったという含意が生じるのである。では、「意図を表す動詞」が過去完了と用いられている例を考えよう。

(40) *I had intended to send it many a long month ago.*

ここでは、*intend* に完了が用いられているので、その意図するという行為がとっくの昔のことになってしまったことが示されるため、やはりその意図したことがらは起こらなかった、という含意が出るのである。以上、この節では過去完了、そして完了形が特別な動詞と一緒になったときに表し得る含意について考察した。

4. 強い否定を表す過去完了否定形

Jespersen(1931) は次のような過去完了が用いられた例を示し、漠然と過去を表すものであると説明する (p. 84)。

(41) I hadn't expected that.

完了を用いる際にはその基準時となる時が必要とされ、過去完了であれば過去のある時点が基準時となるので、基準時となるできごとが示されていない(41)はそのできごとと比べての先行生起を表すわけでもないので「漠然と過去を表す」としたのであろう。では過去完了ではなく、単純過去が用いられた(42)とはどう違うのであろうか。

(42) I didn't expect that.

(42) が「そういうことは思わなかった」という意味を表すのに対し、(41) は「そういうことは思いもしなかった」という強い否定の気持ちを表す。意味の違いが生じる理由は次のように考えられよう。単純過去が用いられている(42)では単に過去のある時点 t に **expect** という動作が起こらなかったと言うのに対し、過去完了が用いられている(41)では、 t という時間よりも前の $t-1$ という時間において **expect** という動作が起こらなかった、ということを言っているのである。 t という時間よりも前の時間を持ち出して **expect** という動作を否定することで、その動作のかけらもなかった、という意味が出てくるのである。従って、過去完了が用いられた方は強い否定を表すことができる。ここで、強い否定を表す過去完了はこれまで言われてきた過去完了とは異なるものであるのかという疑問もあろう。筆者が上のように t という時点と $t-1$ という時点を説明に使ったことから解るように、筆者もこの過去完了はある時点以前の動作の完了を表す通常の過去完了であると考え。違うのは、あるできごとがはっきりと談話内に明示されていて、それを基準にしてそれより以前のできごとを表すために用いられる過去完了ではないということである。そういった用

法ではAというできごととBというできごとの前後関係を表すのみである。強い否定を表す過去完了は基準時を談話内に持たず、話者の頭の中に持ち、その基準時よりも前にある動作が行われなかった、つまり、その動作の微塵もなかったということを表すものである。では、Jespersen が挙げている例以外で過去完了が強い否定を表している例をみてみよう。

- (43) She heaved a deep sigh. It was a sigh of relief. The terrible moment, the moment that night and day, for weeks and months, she had dreaded, had come at last, and yet she felt no terror. Indeed in some measure it was a disappointment to her. The vulgar directness of the question called for a direct answer. The situation had not been gradually led up to. It was crude. It reminded her of a bad rehearsal.
(underline mine. Oscar Wilde, *The Picture of Dorian Gray*. p. 97)

(彼女は深い溜め息をついた。安堵の溜め息だった。恐ろしい瞬間、何週間何か月夜昼恐れていた瞬間がついにやってきた。それなのに彼女は怖くなかった。ある程度失望感があった。ぶしつけであからさまな質問にはやはりあからさまな答えがなされなければならない。状況は次第に高揚しては行かなかった。そのままであった・下手な下稽古のようであった。)

下線部に含まれる過去完了は、gradually という副詞があることから、完了・結果・継続・経験であるとは考えにくい。be gradually led up to [+past] ということが否定されていると考えたほうが自然であろう。「The situation は次第に高揚して行っ (be gradually led up to)たのではない。」と過去完了の否定形で表現され、次の文で「the situation(the situation は it で置き換えられているが) は crude であった」と単純過去で表現さ

れている。単純過法で表されていることがらが実際に起こったできごとであり、「高揚」は起こらなかったのである。従って、**It was crude** という文に対して過去完了が先行生起を表すとは考えられないし、また、過去完了の前の **The vulgar directness of the question called for a direct answer** に対して先行生起を表すことも考えられない。過去に起こらなかったことを表すのなら単純過去の否定形でもよいはずであるのに、ここで過去完了が用いられたのは、さきほど **Jespersen** の例でみたのと同じような理由で強い否定を表さんがためなのである。先行文脈をしてみると、作中人物にとってこれまでずっと恐れていた瞬間が訪れたのである。恐怖は最高潮に達しても不思議ではないし、むしろそうなった方が自然である。普通なら高揚してゆくことが予想される場面であるので、その予想が全く翻されたことを表すには「高揚なんて微塵もなかった」という意味を表すことのできる過去完了が最適であったのである。さらに例をみてゆこう。次の例(44)の先行文脈は次のようになっている。ドリアン・グレイは恋人シビル・ヴェインの演技を激しく非難し、シビルは自殺してしまう。ドリアンは自分がシビルを殺したのも同じだと苦悩する。

(44) Perhaps he had read it , and had begun to suspect something. And, yet, What did it matter? What had Dorian Gray to do with Sibyl Vane's death? There was nothing to fear. Dorian Gray had not killed her.

(underline mine. Oscar Wilde, *The Picture of Dorian Gray*. p. 155)

(ヴィクターはこの記事を読んだだろう。そして疑い始めてるだろう。だが、それがどうしたというのだ。ドリアン・グレイはシビル・ヴェインと何の関係があろう。怖がることはない。ドリアン・グレイが彼女を殺したわけではないのだ。

ここでも過去完了はあるできごとに対して先行生起を表しているのではない。**There was nothing to fear** という文の表す時が基準時であるとは考えられないし、それより以前の文のどれとも考えにくい。やはり、さきほどの例と同じように考えたほうがよかろう。「自分が殺したわけでは決してないので、恐れる必要などないのだ」という強い否定の気持ちが過去完了によって表現されている。次に (45) をみよう。

(45) 'What was she going to kill him with? I forget.'

I hadn't forgotten. I remembered perfectly well, but I wanted to hear what Cal would say.

(underline mine. Sylvia Plath, *The Bell Jar*. p. 167)

(「彼女は何で彼を殺そうとしたんだっけ？ 忘れたの。」私は（そう言ったけど）忘れてなんていなかった。はっきりと憶えていた。カルが何て言うか聞いてみたかったのだ。)

この例の過去完了も具体的なできごとに対し先行生起を表わすものではない。先行談話で **I forget** と言ったことに対してそれを否定するのである。従って、単純過去により **I didn't forget** と表現してもよいはずである。しかし、完了形で否定することで「忘れてなどいなかった」という強い否定を表しているのである。さらにもう一例みよう。

(46) 'Factitious!' my creative writing professor at college scrawled on a story of mine called 'The Big Weekend.'

I hadn't known what factitious meant, so I looked up in the dictionary.

(underline mine. Sylvia Plath, *The Bell Jar*. p., 155)

(私の大学の教授は「The Big Weekend」という私の作品を読んで「factitious」と言った。私は「factitious」という言葉の意味を知らなかったなので、辞書で引いた。)

この過去完了の基準時を教授が“Factitious”と言った時であるとする、それより先にその言葉の意味を知らなかったと認識したことになり不自然である。ある言葉を言われてその意味を知らなかったなら、言われたあとでそう認識するのが普通であり、言葉を聞く前にその言葉の意味を知らないと認識するのは無理である。従って、この過去完了も基準時を持たない、具体的なことがらに対する先行生起を表すものではないことになる。この過去完了も「(作家志望の自分なのにその言葉の意味を)知りもしなかった」という強い否定を表すものであると考えてよかろう。以上、この節では過去完了の表し得る「強い否定」ということについて論じた。

5. 理論適用

この節ではこれまでの考察を *before* 節の過去完了にあてはめてみる。その前に *before* 節の性質についておさえておく。Heinämäki (1978) は、否定的な環境にあらわれる否定対極表現が *before* 節に一律にあらわれ得ることを指摘している (pp. 65–66)。Before 節が表す事態が実現したか実現しなかったかいずれに解釈されるかで2つに分類でき、実現しなかったと解釈される *before* 節には否定対極表現があらわれるとされてきたが、Heinämäki は以下の例のように、実現したと解釈される *before* 節にも否定対極表現があらわれることを示したのである。

(47) John walked in the street for hours before he saw *anyone*.

(48) Bill had to wait for a long time before the doctor *bothered* to examine him.

(49) Tom had to beg Bill before he *lifted a finger*.

従って、「*before* 節はその実現性いかにかわらず、すべて、内在的に否定への傾き (bias) を有する (江口 1989: 146)」ということができる。では、*before* 節の過去完了について考えよう。第1節のBグループの文を

再びみってみる。(14) をその代表にする。

(14) John dived into the swimming-pool before Mary had put water in it.

この **before** 節の過去完了は主節に対する従属節の先行生起を表すものではない。主節に従属節の事態が先行するとするならば接続詞 **before** の表す時間関係と矛盾を起こしてしまう。これまで我々がみてきた過去完了が **before** 節という否定的な環境にあらわれたものであると考えられよう。**Before** の否定性と過去完了とで、過去完了の否定形と同じように、「強い否定」を表すのである。単純過去が用いられた場合は **before** 節は、単に「～する前に」ということを表現するのに対し、過去完了が用いられると、意味が強められ、「～するどころかその前に」という意味が現れるのである。従って、(8) について言えば、**before** 節に過去完了があることから、「Mary がプールに水をいれるどころかその前に」という意味が出る。このため、「A **before** B という表現において、B が起こってから A が起こるのが自然なことである」という聞き手の解釈がなされるのである。(9-ii) の「予測に反して」という含意が現れるのはこのような経過によるのである。このことは B グループのどの例文にもあてはまる。

では、第1節で問題にした (i) に立ち戻り、次の2つの文の容認性の違いをこれまで示された我々の理論でとらえ直して説明をつけてみよう。

(2) *John wrote a novel before he had died.

(3) The executioners buried John before he had died.

動詞 **die** はその動詞自体の表す動作の性質から一般的な完了（完了・結果・経験・継続）とは共起しにくい。また、**before** が用いられているので勿論、(2)、(3) の過去完了は主節に対する従属節の先行生起を表すものではない。従って、別の過去完了の用法を探さねばならない。このことは、我々が今まで考えてきた、もう1つの過去完了の存在を証明するものであ

る。(2)、(3)の過去完了は *before* と相俟って「強い否定」を表すものであるという解釈をせねばならないのである。その解釈の上で2つの例文をみると(3)は「死刑執行人はジョンが死ぬどころかその前にジョンを埋めた」となり、意味的に正しい文になるが、(2)は「ジョンは死ぬどころかその前に小説を書いた」となり、意味的に受け入れられない文になってしまう。こういったことから(2)の文の容認不可能性が認識されるのである。

6. 結 論

以上の考察により、次のことが言える。

- ① 過去完了はある環境(特別な動詞との組み合わせ)により、心念を表すある含意を生むことがあり、特に否定的な環境においては「強い否定」という心念を表すことがある。
- ② *Before* 節は基本的に否定的な環境であるので、その中に過去完了が用いられると「強い否定」を表すことがある。そのときはその「強い否定性」のため、「起こるだろうと予想していた順序と逆の順序で事が起こった」という含意を表すのである。

[参 考 文 献]

- Anderson, J. M. (1973), "On Existence and the Perfect," *FL* 10. 333-337.
Bauer, G. (1970), "The English 'Perfect' Reconsidered," *JL* 6. 189-198.
Comrie, B. (1976), *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
_____. (1985), *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
Darden, B. J. (1968), "Is the English Perfect as Embedded Past? A Statement from the Devil's Advocate," *CLS* 4. 14-21.

- Declerck, R. (1979), "Tense and Modality in English *Before*-clauses," *English Studies* 60. 6. 720–744.
- 江口 巧 (1989), 「Before 節の完了形—その法的表現としての地位に関する考察—」『英語学の視点』九州大学出版会 141–157.
- Edgren, E. (1971), *Temporal Clauses in English*. Uppsola.
- Fenn, P. (1987), *A Semantic and Pragmatic Examination of the English Perfect*. Gunter Narr Verlag Tübingen.
- Heinämäki, O. T. (1972), "Before," *CLS* 8. 139–151.
- _____. (1979), *Semantics of English Temporal Connectives*. UMI.
- 岩倉国浩 (1969), 「完了形の機能」『英語青年』1969年11月号 東京：研究社.
- Jespersen, O. (1931), *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part IV. London: George Allen & Unwin.
- 川瀬義清 (1989), 「Before 節における完了形と含意」『英語学の視点』九州大学出版会 111–122.
- Lakoff, G. (1970), "Linguistics and Natural Logic," *Semantics of Natural Language*. ed. by D. Davidson and G. Harman, Dordrecht: Reidel. 545–665.
- Leech, G. N. (1971), *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- Linebarger, M. (1987), "Negative Polarity and Grammatical Representation," *Linguistics and Philosophy* 10. 325–387.
- 松村瑞子 (1989), 「非論理的過去完了形」『英語学の視点』九州大学出版会 123–139.
- McCoard, R. W. (1987), *The English Perfect: Tense Choice and Pragmatic Inferences*. Amsterdam: North-Holland Pub.
- 宮原文夫 (1969), 「過去完了形の機能—田桐・田中、両氏の所論にふれて—」『英語青年』1969年6月号 東京：研究社.
- 中村芳久 (1980), 「Before の語用論」『島根大学法文学部紀要』3. 159–174.
- 田中賢次 (1969), 「『過去完了形の神秘』によせて」『英語青年』1969年3月号 東京：研究社.
- Salkie, R. (1989), "Perfect and Pluperfect: What is the Relationship?," *Journal of Linguistics* 25. 1–34.

田桐大澄 (1969), 「過去完了形の神秘」『英語青年』1969年1月号 東京: 研究社.

安井 稔 (1989), 『英文法を洗う』研究社.

Zydatiss, W. (1978), “‘Continuative’ and ‘Resultative’ Perfects in English,”

Lingua 44: 4. 339–362.

[引用文献]

Plath, Sylvia (1963), *The Bell Jar*. Faber and Faber.

Wilde, Oscar (1891), *The Picture of Dorian Gray*. Penguin Books.

1992. 1. 31. 受理